

授業科目	失語症Ⅱ（評価）				
担当者	井上直哉・大根茂夫				
専攻(科)		学 年	1 年	総単位数	1 単位
	言語聴覚専攻科	開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 授業目的・内容

失語症の治療・訓練・指導に必要な各種失語症検査法の概略を学ぶ。
検査から評価の仕方、結果の解釈の仕方、訓練法の立案を学ぶ。
各種失語症検査を標準的な実施方法で実施できるように演習を行う。

■ 到達目標

各種失語症検査の概要を知る。
各種失語症検査および関連検査を標準的な方法で実施できる。
検査結果から、結果の解釈、問題点の抽出、訓練の立案ができる。
評価報告書が書ける。

■ 授業計画

- 第1回 急性期・回復期・維持期の失語症患者の容態、医学的情報の収集の仕方、面接の仕方
- 第2回 スクリーニング検査の意義と実施方法
- 第3回 標準失語症検査（SLTA）の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に活かすみかた（1）
- 第4回 標準失語症検査（SLTA）の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に活かすみかた（2）
- 第5回 WAB 失語症検査の概略
- 第6回 重度失語症検査の概略
- 第7回 標準失語症検査補助検査（SLTA - ST）の概略
- 第8回 失語症語彙検査の概略
- 第9回 実用コミュニケーション能力検査（CADL）の概略
- 第10回 失語症構文検査、トークンテストの概略
- 第11回 語音弁別検査、モーラ分解・抽出検査の概略
- 第12回 鑑別診断、経過と予後、訓練・援助の方針の決定
- 第13回 評価報告書の書き方
- 第14回 症例演習（1）
- 第15回 症例演習（2）

■ 評価方法

筆記試験（100点満点）と、実技試験（100点満点）を行う。 筆記試験、実技試験とも60点以上を合格とする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業で各種検査法の手技の説明を受けた後、学生同士でペアを作り、お互いに検査者、被検者になり検査練習を行うこと。ペアを変え、3例以上の検査練習を行うこと。検査練習は空き時間を有効に使うこと。すべての検査マニュアルを熟読し暗記すること。

■ 教科書

書 名：標準失語症検査マニュアル 改訂第2版
著者名：日本高次脳機能障害学会（旧 日本失語症学会）
出版社：新興医学出版社

書 名：脳卒中後のコミュニケーション障害 改定第2版
著者名：竹内愛子・河内十郎
出版社：協同医書出版社

■ 参考図書

書名：なるほど！失語症の評価と治療—検査結果の解釈から訓練法・立案まで—
著者名：大塚裕一／宮本恵美
出版社：金原出版

■ 留意事項

必要に応じて各種失語症検査の実施方法を習得するための補講を行います。

本授業は臨床実習前ガイダンスと密接に連携しています。

失語症Ⅲ（訓練）、失語症Ⅳ（臨床講義）につながるようしっかりと取り組んでください。

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。